

どんな職業か

建築物の外部や内部に塗料を塗って美しく彩り、日光や雨、湿気、スモッグなどで傷んだり汚れたりするのを防ぎ、あるいは快適な室内空間となるように仕上げる。いわば建築の仕上工であり、建物の美容師である。

まず、建物の持ち主と相談しながら建物の各部分の素材をよく調べ、適切な塗料や色合い（色彩設計）を決めて仕様書を作成、それに基づき施工計画書（施工要領書）を作成し、塗装作業に入る。塗装作業では、素地の状態を調べ、表面を塗装できる状態に調整した後、刷毛（はけ）やローラーブラシ、スプレーガンを使って塗装する。塗装工程はいろいろな異種塗料の組合せによってできているので、正しく施工要領書に基づいて施工されるように管理したり、できた塗膜の検査をすることも大事な仕事である。

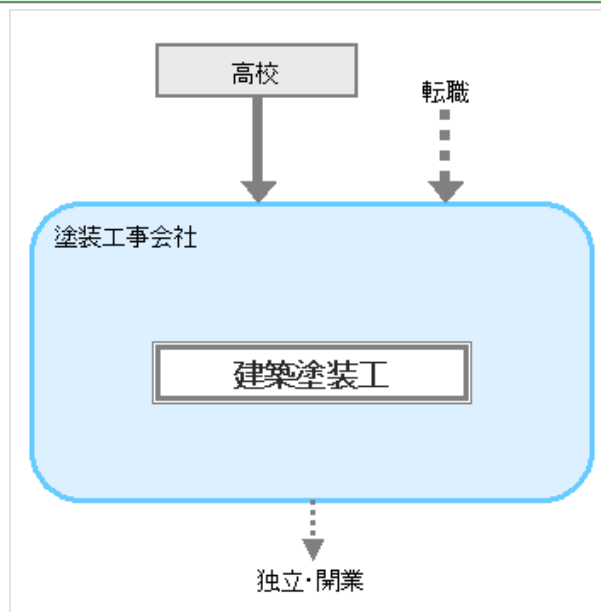
最近では建築物のストック時代に入り、新築の塗装工事よりは、古くなった建物を再生するための塗装工事が主流となってきており、そのような工事では建物の傷み具合を調査・診断して塗装工事を進めるため、高い技術が必要とされる。

就くには

入職にあたって、特に必要な学歴、免許、資格はない。それぞれの塗装業者が広い範囲から人材を求めており、入職状況を見ると転職者が一番多く半数近くを占めている。入職後の努力により、技術・技能の向上を図り経験を積むことによって、塗装工から塗装工を現場などで管理する技術者へと進む道が開かれている。

「塗装技能士」、「建築施工管理技士」の資格をはじめ、関連の免許・資格を取得することにより、地位も安定し、給与面でも恵まれ、また昇進の可能性も高まる。経営能力を発揮して自営業として独立、開業する可能性も大きく、塗装工事業に小規模企業が多いのは、塗装工から自営業主へと独立するケースが多いことの表れである。

塗装作業そのものは一見単純作業が中心であるが、準備段階の複雑さや、あるいは仕事が他の職種と深いかわりを持つことから、判断力や協調性、管理能力といったものが適性として求められる。また、いろいろな作業環境での仕事に耐えるために、体力も必要である。



労働条件の特徴

全体の約9割が従業者9人以下の小規模な事業所で占められているが、仕事の内容が進歩し複雑化するに従って規模が拡大しており、100人以上の大規模な事業所も都市部を中心に見られる。

塗装工事は、工場内で生産活動するのではなく、建設現場をはじめ建築物のある場所が仕事の場となるため、その労働条件は建設業一般と同様である。

賃金の支払い形態は、日給月給制の割合が5割弱、月給制が2割くらいである。

休日についても建設業一般と同様な傾向が見られ、土曜・日曜、祝日を休む4週8日制を目標とするようになっているが、工期の関係で、休日に働く場合もある。

建築塗装の分野では、塗装の質の充実を目指して新しい技術、工法の開発が行われている。高級ホテルやビルなどに用いられる工芸的塗装のデコレイティブ・ペインティングはその一例で、建築塗装工は塗装の技能に加えて美に対するセンスを必要とした職業になってきている。

また、塗装そのもののみでなく、塗装技能の「塗る」「貼る」「詰める」等の基本操作を活用して、塗装材料以外の他種類の材料による仕上げを同時に施工する様に範囲が広がってきており、「総合仕上げ工」として仕事をすることも可能となっている。

参考情報

関連団体 社団法人 日本塗装工業会  
<http://www.nittoso.or.jp>

関連資格 塗装技能士 有機溶剤作業主任者 毒物劇物取扱責任者 危険物取扱者 建築施工管理技士